

日蓮大聖人御書全集

なんじょうひょうえしちろうどのごしょ

南条兵衛七郎殿御書

新版
1824
S
1831

なんじょうひょうえしちろうどのごしょ

南条兵衛七郎殿御書

ぶんえいがんねん

文永元年(’64)

12月13日

43歳

南条兵衛七郎

がつ にち

きい

なんじょうひょうえしちろう

ごしょろう

よしうけたまわ

そうちろう

真

そうちろう

せけん

御所労の由

承り候は、まことにてや

候らん。世間

せけん

なんじょうひょうえしちろう

の定めなきことは、病なき人も留まりがたきことに候え

ば、まして病あらん人は申すにおよばず。ただし、心あ

こころ

らん人は、後世をこそ思いさだむべきにて候え。また後世

を思ひ定めんことは、私にはかないがたく候。一切

いっさい

を思ひ定めんことは、

私はかないと候。一切

もと

衆生の本師にてまします釈尊の教えこそ、本にはなり

そうちろう

もと

候べけれ。

ほとけ

おし

区

々

ひと
こころ

ふじょう
ふじよう

なるゆえか。

しかれども、釈尊の説教、五十年にはすぎず。さき

しじゅうよねん

あいだ

しゃくそん
せつきよう
ごじゅうねん

けごんぎょう
けごんぎょう

ここる
ほとけ

しゅじょう

四十余年の間の法門に、華厳經には「心、仏および衆生、

みつ

さべつな

あごんきょう
あごんきょう

く
くう

むじょう
むじょう

む
が

この三つは差別無し」、阿含經には「苦・空・無常・無我」、

だいじつきょう

ぜんじょうゆうずう
かんぎょう

だいほんぎょう
だいほんぎょう

く
くう

むじょう
むじょう

む
に

大集經は「染淨融通」、大品經には「混同して無一なり」、

そうかんぎょう

かんぎょう

あみだきようとう
あみだきようとう

く
くらく

おうじょう
おうじょう

む
に

双觀經・觀經・阿弥陀經等には「極樂に往生す」。これ

せつきよう

ぞうほう

まつぼう

いっさいしゅじょう

救

らの説教は、みな正法・像法・末法の一切衆生をすぐわ
んがためにこそとかれはんべり候いけめ。

説

そうちら

ほとけ

思

むりようぎきょう

ほうべんりき

しかれども、仏いかんがおぼしけん、無量義経に「方便力

しじゅうよねん

しんじつ あらわ

説

をもつて、四十余年にはいまだ真実を顯さず」ととかれて、

さきしじゅうよねん

おうじょうごくらくとう いっさいきょう おや せんぱん

悔

先四十余年の往生極樂等の一切經は親の先判のごとくく

返

いかえされて、「無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐるとも、

つい むじゅおぼだい

じよう

え

言

切

たま

終に無上菩提を成ざることを得ず」といきらせ給いて、

ほけきょう

ほうべんぽん

かさ

しようじき

ほうべん

す

法華經の方便品に、重ねて「正直に方便を捨てて、ただ

むじょうどう

と

説

たま

ほうべん

捨

説

無上道を説くのみ」ととかせ給えり。方便を捨てよととか

しじゅうよねん

ねんぶつとう

捨

れてはんべるは、四十余年の念佛等をすべてよととかれて

そうちうう

候。

確

悔

じつぎ

定

せそん

こうたしかにくいかえして、実義をさだむるには、「世尊

ほうひさ

のち からら

まさ しんじつ と

ひさ

は法久しくして後、要ず當に真実を説きたもうべし」「久し

よう もく

つと

すみ

と

とう

定

くこの要を黙して、務めて速やかには説かず」等とさだめ

たほうぶつだいち

湧

出

たま

られしかば、多宝仏大地よりわきいでさせ給いて「このこ

しんじつ

加

じっぽう

しょぶつはっぽう

集

と真実なり」と証明をくわえ、十方の諸仏八方にあつま

こうちゅうぜつそう

だいほんてんぐう

付

たま

にしょさんえ

りて広長舌相を大梵天宮につけさせ給いき。二処三会、

にかいはぢばん

しゅじょう

いちにん

二界八番の衆生、一人もなくこれをみ候いき。

もん 見 そうちらう

ぶつきょう

見 そうちら

あくにん

げどう

これらの文をみ候に、仏教を信ぜぬ悪人・外道はさて

そうちら

ぶつきょう

なか

い

そうちら

にぜんごんきょう

ねんぶつ

おき候いぬ、仏教の中に入り候いても、爾前權教の念仏

とう
あつ
しん
じつぺん
ひやつぺん
せんべん
いちまんないしろくまんとう
いちにち
等を厚く信じて、十遍・百遍・千遍、一万乃至六万等を一日
にはげみて、十年二十年のあいだにも南無妙法蓮華経と
一遍だにも申さぬ人々は、先判に付いて後判をもちいぬ者
にては候まじきか。これらは、仏説を信じたりげには我が
身も人も思いたりげに候えども、仏説のごとくならば、
不孝の者なり。

う
ゆえ
ほけきよう
だいに
い
なか
しゅじよう
いま
さんがい
みな
わ
わ
よ
う
いま
ところ
もうもう
げんなんおお
われいちにん
よ

くど

きょうしょう

しんじゅ

とううんぬん

く救護をなす。また教詔すといえども、信受せず」等云々。

もん

こころ

しゃかによらい

われ

しゅじょう

おや

し

しゅ

この文の心は、釈迦如来は我ら衆生には親なり師なり主

われ

しゅじょう

おや

し

あみだぶつ

やくしぶつとう

しゅ

なり。我ら衆生のためには、阿弥陀仏・薬師仏等は、主に

おや

し

てはましませども、親と師とにはましまさず。ひとり三徳を

兼
おん 深
ほとけ
しゃかいちぶつ
限

かねて恩ふかき仏は、釈迦一仏にかぎりたてまつる。親も

親にこそよれ、釈尊ほどの親、師も師にこそよれ、主も主

おや
しゃくそん
し
し
有
難

にこそよれ、釈尊ほどの師・主はありがたくこそはべれ。

おや
し
しゅ
おお
背
者
てんじんちぎ
捨

この親と師と主との仰せをそむかんもの、天神地祇にして

ふこうだいいち
もの

ゆえ

られたてまつらざらんや。不孝第一の者なり。故に、「また

きょうしょう

しんじゅ

とう
と

教詔すといえども、信受せず」等と説かれたり。たとい、

にぜん きょう 付 たま ひやくせんまんおくこうきょう たも

爾前の経につかせ給いて百千万億劫行ぜさせ給うとも、

ほけきょう いっぺん なんみょうほうれんげきょう もう たま ふこう たも

法華経を一遍も南無妙法蓮華経と申させ給わば、不孝の

ひと ゆえ さんぜじっぽう しようしゅ 捨 てんじんちぎ

人たる故に、三世十方の聖衆にもすてられ、天神地祇にも

怨 たま いち 捨 てんじんちぎ

あだまれ給わんか「これ一」。

ごぎやくじゅあく

むりよう あく

造

ひと

こん

り

たとい五逆十惡・無量の悪をつくれる人も、根だにも利

とくどう

だいばだつた

おうくつまらとう

なれば、得道なることこれあり。提婆達多・鳩崛摩羅等こ

こんどん

つみ

とくどう

とくどう

れなり。たとい根鈍なれども、罪なければ得道なることこ

すりはんどくとう

われ

しゅじょう

こん

どん

れあり。須利槃特等これなり。我ら衆生は、根の鈍なるこ

須利槃特

過

もの

色

形

弁

と、すりはんぐにもすぎ、物のいろかたちをわきまえざ
ること、羊目のごとし。貪・瞋・癡きわめてあつく、十惡は
日々におかし、五逆をばおかざれども、五逆に似たる罪、
また日々におかす。

じゅうあくじりやへ

ほうぼう
ひと

また十惡五逆にすぎたる謗法は人ごとにこれあり。させ
ることば ほけきょう ぼう ひと 少ひと ひと
る語をもつて法華經を謗ずる人はすくなけれども、人ごと

ことば
ほけきょうう
用
ほけきょうう
語をもつて法華経を謗ずる人はすくなけれども、
ほけきょうう
少ひと
ひと
人ごと
ねんぶつ

ほけきょう

用

用

人 ひと

ねんぶつ

に法華經をばもちいす。またもちいたるようなれども、念佛

とうじん深

しんじん

もの

ほけきょう

等のようには信心ふかからず。信心ふかき者も、法華経の

敵 責

だいぜん

ほけきよう

せんまんぶ

かたきをばせめず。いかなる大善をつくり、法華経を千万部

よ しょしゃ いちねんさんぜん かんどう え ひと ほけきょう
読み書きし、一念三千の観道を得たる人なりとも、法華經の
敵 敵 ひと ひと ひと ひと ひと
かたきをだにもせめざれば得道ありがたし。たとえば、朝に
仕 仕 ひと じゅうねんにじゅうねん ひと ひと
つかうる人の、十年二十年の奉公あれども、君の敵をしり
そ う そ う そ う そ う
ながら奏もせず、私 私 おこな おこな おこな おこな おこな
にもあだまづば、奉公皆うせて、還つ
わたくし わたくし わたくし わたくし わたくし わたくし
怨 怨 とうせい とうせい とうせい とうせい とうせい
てとがに行われんがごとし。当世の人々は謗法の者としろ
とうせい ひとびと ひとびと ひとびと ひとびと ひとびと
ほうこうみな失 ほうこうみな失 ほうこうみな失 ほうこうみな失 ほうこうみな失
てとがに行われんがごとし。当世の人々は謗法の者としろ
ほうぼう もの もの もの もの もの
知 知 じかい じかい じかい じかい じかい
しめすべし これ これ これ これ これ これ
に に に に に に に

ほとけにゅうめつ つぎ ひ せんねん しょうほう もう
仏入滅の次の日より千年をば正法と申して、持戒の人
おお とくどう ひと とくどう ひと とくどう ひと
多く、得道の人これあり。正法千年の後は像法千年なり。
はかい もの おお とくどう とくどう ひと ひと
破戒の者は多く、得道すくなし。像法千年の後は末法万年な
ぞうほうせんねん のち まっぽうまんねん

り。持戒もなし、破戒もなし、無戒の者のみ國に充滿せん。
しかも濁世と申してみだれたる世なり。清世と申してすめ
る世には、直縄のまがれる木をけずらするように、非をす
て是を用いるなり。正像より五濁ようよういできたりて、
末法になり候えば五濁さかりにすぎて、大風の大波をおこ
してきしをうつのみならず、また波と波とをうつなり。
見濁と申すは、正像ようようすぎぬれば、わずかの邪法の
一つをつたえて無量の正法をやぶり、世間の罪にて惡道に
おつるものよりも、仏法をもつて惡道に墮つるもの多しと

みえはんべり。
見

とうせい

しょうぞうにせんねん過

まっぽう

い

しかるに、当世は、正像

二千年すぎて末法に入つて

ぜんこん

おお

あくどう

にひやくよねん

けんじょく

盛

二百余年、見濁さかりにして、惡

よりも善根にて多く惡道

あく

あく

従

に墮つべき時刻なり。惡は、愚癡の

人も惡とすれば、したが

ぜん

ぜん

ぜん

わぬ邊もあり。火を水をもつてけすがごとし。善は、ただ善

と思ふほどに、小善に付いて大惡の起ることをしらす。

ぜん

ぜん

ぜん

と思ふほどに、小善に付いて大惡の起ることをしらす。

おも

しようぜん

つ

だいあく

お

知

ゆえに伝教・慈覺等の聖跡あり、すたれ、あばるれども、

でんぎょう

じかくとう

しようせき

だいあく

お

荒

「念佛堂にあらず」といひてすておきて、そのかたわらに

ねんぶつどう

言

捨

置

傍

あたらしく念佛堂をつくり、かの寄進の田畠をとりて

新

ねんぶつどう

きしん

でんぱた

取

ねんぶつどう

寄

ぞうほうけつききょう

もん

念佛堂によす。これらは、像法決疑經の文のごとくならば、

くどく

功德すくなしと見えはんべり。これらをもちてしるべし。善

だいぜん

破

しようぜん

あくどう

お

なれども、大善をやぶる小善は、惡道に墮つるなるべし。

いま

よ

まつぼう

初

しようじょうきょう

き

今世は末法のはじめなり。小乗經の機、權大乗經

き

失果

じつだいじょうきょう

き

の機、みなうせはてて、ただ實大乗經の機のみあり。小船

たいせき

載

あくにん

ぐしゃ

たいせき

には大石をのせず。惡人・愚者は大石のごとし。小乗經

ごんだいじょうきょう

ねんぶつどう

しようせん

だいあくそう

とうじとう

ならびに權大乗經・念佛等は小船なり。大惡瘡の湯治等

やまいだい

しょうじ

まつだいじょくせ

われ

は、病大なれば小治およばず。末代濁世の我らには、念佛

とう

ふゆ

た

つく

等は、たとえば、冬、田を作るがごとし。時があわざるな

とき

合

り **〈これ三〉。**

くに 知 くに したが ひと ここるふじょう
国をしるべし。国に随つて人の心不定なり。たとえば、
こうなん たちばな わいほく 移 こころ
江南の橘 の淮北にうつされてからたちとなる。心なき
こうもく 所 こころ
草木すらところによる。まして心あらんもの、何ぞ所に
よらざらん。

げんじょうさんぞう さいいき もう ふみ てんじく くにぐに おお しる
されば、玄奘三蔵の西域と申す文に天竺の国々を多く記
くに なら
したるに、國の習いとして、不孝なる國もあり、孝の心あ
くに しんに 盛 ふこう くに
る國もあり。瞋恚のさかんなる國もあり、愚癡の多き國も
あり。一向に小乗を用いる國もあり、一向大乗を用いる
いっこう しょうじょう もち
くに
いっこうだいじょう もち

國もあり、大小兼学する國もありと見え侍り。また一向に殺生の國、一向に偷盜の國、また穀の多き國、また粟等の多き國、不定なり。

そもそも日本国はいかなる教えを習つてか生死を離るべき國ぞと勘えたるに、法華經に云わく「如來滅して後において、閻浮提の内に、広く流布せしめて、断絶せざらしめん」等云々。この文の心は、法華經は南閻浮提の人そのための有縁の經なり。弥勒菩薩云わく「東方に小国有り。ただ大機のみ有り」等云々。この論の文のごときは、閻浮提の

うち　ひがし　しょうこく　だいじょうきょう　き
内にも、東の小国に大乗経の機あるか。肇公、記して
云わく「この典、東北の小国に有縁なり」等云々。法華経
は東北の国に縁ありとかかれたり。安然和尚云わく「我が
日本国には皆大乗を信ず」等云々。惠心、一乗要決に云わ
く「日本一州、円機純一なり」等云々。

しゃかによらい　みろくぼさつ　しゅりやそまさんぞう　らじゅうさんぞう　ぞうじょう
釈迦如来・弥勒菩薩・須梨耶蘇摩三藏・羅什三藏・僧肇
ほつし　あんねんかしよう　えしんのせんとくとう　にほんこく　もつぱ
法師・安然和尚・惠心先徳等の心ならば、日本国は純ら
に法華経の機なり。一句一偈なりとも行ぜば、必ず得道な
るべし。有縁の法なるが故なり。たとえば、くろがねを磁石
うえん　ほう　ゆえ　鉄　じしゃく

のすうがごとし。方諸の水をまねくににたり。念佛等の余善
は無縁の国なり。磁石のかねをすわず、方諸の水をまねか
ざるがごとし。故に、安然、釈して云わく「もし実乗に
あらずんば、恐らくは自他を欺かん」等云々。この釈の心
は、日本國の人に法華經にてなき法をさずくるもの、我が
身をもあざむき、人をもあざむく者と見えたり。されば、法
は必ず國をかんがみて弘むべし。彼の国によかりし法なれ
ば必ずこの国にもよかるべしとは思うべからず（これ四）。

また、仏法流布の国においても前後を勘うべし。仏法を

ぶつきょう

しょうじょう

ひろ

くに

だいじょうきょう

仏教においても、小乗の弘まれる国をば、大乗經を

破

むじやくぼさつ

せしん

しょうじょう

もつてやぶるべし。無著菩薩の世親の小乗をやぶりしが

ごんださいじょう

ひろ

くに

じつだいじょう

ごとし。權大乗の弘まれる国をば、実大乗をもつてこれ

てんだいちしゃだいし

なんさんほくしち

じょうじょう

をやぶるべし。天台智者大師の南三北七をやぶりしがごと

にほんこく

てんだい

しんごん

にしゅう

廣

し。しかるに、日本國は、天台・真言の二宗のひろまりて今

しひやくよさい

びく

びくに

優

婆

塞

優

婆

夷

し

しゅ

みな

に四百余歲、比丘・比丘尼・うばそく・うばいの四衆、皆、

ほけきよう

き

さだ

ぜんにん

あくにん

うち

むち

みな

ごじってんでん

法華經の機と定まりぬ。善人・惡人、有智・無智、皆、五十展転

くどく

具

いし

ほうらいさん

どく

の功德をそなう。たとえば、崑崙山に石なく、蓬萊山に毒な
きがごとし。

ごじゅうよねん

ほうねん

だいほうぼう

もの出

きたりて、一切衆生をすかして、珠に似たる石をもつて珠

たま

に

いし

たま

を投げさせ、石をとらせたるなり。止觀の五に云わく「瓦礫

がりやく

を貴んで明珠なりとす」と申すはこれなり。一切衆生、

もう

いっさいしゅじょう

石をにぎりて珠とおもう。念佛を申して法華經をすてたる、

もう

ほけきょう

これなり。このことをば申せば、還つてはらをたち、法華經

かえ

ほけきょう

の行者をのりて、ことに無間の業をますなり 〈これ五〉。

ご

ただし、とのはこのぎをきこしめして、念佛をすて法華經

ねんぶつ

ほけきょう

にならせ給いてはべりしが、定めてかえりて念佛者にぞな

ねんぶつしゃ

さだ

たま

たま

ほけきょう

ねんぶつしゃ

たま

らせ給いてはべるらん。法華経をすてて念佛者とならせ給

みね いし たに 転 そら あめ ち 落

思

わんは、峰の石の谷へころび、空の雨の地におつるとおぼせ。

だいあびじごくうたが

大阿鼻地獄疑いなし。大通結縁の者の三千塵点劫を、久遠

げしゅ もの

ごひやくじんてん

へ

だいあくちしき

下種の者の五百塵点を経しこと、大惡知識にあいて法華経

捨

ねんぶつとう

ごんきょう

移

ゆえ

いつけ

ひとびと

をすてて、念佛等の權教にうつりし故なり。一家の人々、

ねんぶつしゃ

そうちら

念佛者にてましましげに候いしかば、さだめて念佛をぞ

勸

たま

そうちらう

わ

しん

すすめまいらせ給い候らん。我が信じたることなればそ

どうり

そうちら

あくま

ほうねん

いちるい

誑

れも道理にては候えども、惡魔の法然が一類にたばらかさ

ひとびと

思

お

おんもち

れたる人々なりとおぼして、大信心を起こし、御用いある

べからず。大惡魔は貴き僧となり、父母・兄弟等につきて、人の後世をばさうるなり。いかに申すとも、法華經をすてよとたばかりげに候わんをば、御用いあるべからず。

まず御きようざくあるべし。念佛、實に往生すべき証文つよくば、この十二年が間、「念佛者、無間地獄」と申すをば、いかなるところへ申しだしてもつめずして候べきか。よくよくゆわきことなり。法然・善導等がかきおきて候ほどの法門は、日蓮らは十七・八の時よりして候いき。このごろの人の申すこと、これにすぎず。結句

ほうもん 敵

寄

戦

そうちろう

は法門はかなわずして、よせてたたかいにし候なり。
念仏者は数千万、かとうど多く候なり。日蓮はただ一人、
かとうどは一人もこれなし。今までもいきて候は
ふかしげなり。

今年も十一月十一日、安房国東条の松原と申す大路に
して、申酉時、数百人の念佛等にまちかけられ候いて、
よう 合

日蓮はただ一人、十人ばかり、ものの要にあうものはわざ
かに三・四人なり。いるやはふるあめのごとし、うつたちは
いなづまのごとし。弟子一人は当座にうちとられ、二人は
稻 妻 で いちにん とうざ 打 取 ににん

大事のてにて 候。自身もきられ打たれ、結句にて 候いし
ほどに、いかが候いけん、うちもらされて今までいきて
はべり。いよいよ法華経こそ信心まさり候え。第四の巻に
云わく「しかもこの経は、如來の現に在すすらなお怨嫉多
し。いわんや滅度して後をや」。第五の巻に云わく「一切世間
に怨多くして信じ難し」等云々。日本国に、法華経よみ学す
る人これ多し。人のめをねらい、ぬすみ等にて打ちはらる
る人は多けれども、法華経の故にあやまたるる人は一人も
なし。されば、日本国の持経者は、いまだこの経文にはあ

たま

にちれんいちにん

読

われ

しんみょう

あい

わせ給わず。ただ日蓮一人こそよみはべれ。「我は身命を愛

せず、ただ無上道を惜しむのみ」、これなり。されば、日蓮

は日本第一の法華経の行者なり。

先

立

たま

ぼんてん

たいしゃく

しだいてんのう

えんま

もしさきにたたせ給わば、梵天・帝釈・四大天王・閻魔

だいおうとう

もう

たも

にほんだいいち

ほけきょう

ぎょうじや

大王等にも申させ給うべし。「日本第一の法華経の行者・

にちれんぼう

でし

名乗

たま

芳

心

日蓮房の弟子なり」となのらせ給え。よもほうしんなきこ

そうら

いぢ

ねんぶつ

いちど

ほけきょう

唱

とは候わじ。ただし、一度は念佛、一度は法華経となえつ。

にしん

ひと

き

憚

そうら

そ

二心ましまし、人の聞きにはばかりなんだだにも候わば、

にちれん

でし

もう

おんもち

そ

のち

恨

よも、「日蓮が弟子」と申すとも御用い候わじ。後にうらみ

たも

ほけきよう

こんじょう

祈

させ給うな。ただし、また法華経は今生のいのりともなり

そうろう

生

たま そうちら

候なれば、もしやとしていきさせ給い候わば、あわれ、

疾 げんざん

自

もう

開

ことば

文

とくとく見参して、みずから申しひらかばや。語はふみに

尽 文 こころ

尽

難

そうちら

止

そうちら

つくさず、ふみは心をつくしがたく候えば、とどめ候い

きようきようきんげん

ぬ。恐々謹言。

ぶんえいがんねんじゅうにがつじゅうさんにち

文永元年十一月十三日

日蓮

花押

にちれん

かおう

南

条

しちろうどの

なんじょうの七郎殿